

平安和文会話文における準体句 —「が、を、に及び係助詞」以外の助詞後接の場合—

土岐 留美江

日本語教育講座

Quasi-nominal phrases in Heian Japanese Conversational Texts — Cases with other Postpositional Particle —

Rumie TOKI

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Abstract

This paper examines lexical-semantic properties of verbs, adjectives and auxiliaries appearing in quasi-nominal phrases (quasi-nominal construction with adnominal verbal ending) which are accompanied by postpositional particle “yori,” “made,” “nado,” “to,” “no,” “kara,” “simo,” “gagoto,” “dani,” “tomo,” “nomi,” and “sae,” in comparison with those with other postpositional particle such as “wa” and “mo,” and other attributive constructions such as adnominal clauses or final-attributives (sentences ending in adnominal form) in colloquial Heian Japanese.

The specific findings are as follows:

- (a) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “yori,” “made,” “nado,” “to,” “no,” “kara,” “simo,” “gagoto,” “dani,” “tomo,” “nomi,” and “sae,” verbs of motion/change, verbs of emotion/thought/perception, verbs of existence are most frequent, in descending order.
- (b) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “yori,” “made,” “nado,” “to,” “no,” “kara,” “simo,” “gagoto,” “dani,” “tomo,” “nomi,” and “sae,” two adjective types (emotional and intermediate) appear, but not type-attributive.
- (c) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “yori,” “made,” “nado,” “to,” “no,” “kara,” “simo,” “gagoto,” “dani,” “tomo,” “nomi,” and “sae,” both past and perfect auxiliaries and conjecture auxiliaries are frequently used.

It is revealed that there are some usage differences between quasi-nominal phrases with postpositional particle “yori,” “made,” “nado,” “to,” “no,” “kara,” “simo,” “gagoto,” “dani,” “tomo,” “nomi,” and “sae,” and those with other postpositional particle.

1. はじめに

古代日本語における活用語の連体形には、

- ①連体修飾節を形成する連体用法
- ②そこで文を終止する連体形終止法
- ③名詞を伴わずに連体形だけで名詞句相当の働きをする準体用法

の三つの用法がある。

①は現代日本語にも見られる通常の連体節形成機能であるが、②と③は古代語特有の用法である。

②の連体形終止法については、通常の終止形終止と

の表現性の差異や文体的特徴、または構文的要因などについて、山内（2003）を代表とする多くの先行研究がある。

また、③の準体用法については、断定の助動詞の活用語承接の衰退について連体形準体法の消滅と関連づけて論じた信太（1970）や、準体法の消滅過程について連体形や連体形終止との関連で考察した同（1987）、準体助詞「の」の成立との関連を論じた同（2006）、現代語の「の」節「こと」節との関係で、中古語準体句の特徴について述べた近藤（2001）などがある。

古代日本語に見られる連体形の用法の広範囲な広が

りは、古代語の大きな特徴の一つであり、なぜ、①連体修飾節形成、②文終止、③名詞句形成、という相互にまったく異なると思われる文法機能が、連体形という同一の文法形式により担われるのかという問題が存在する。

これらの用法の相互の関係については、連体形終止を「準体句の直接表出（山内（2003）p. 141）」と見る解釈がなされており、尾上（1982）などでも同様の立場から連体形終止法の表現性のメカニズムが詳細に分析されている。また、信太知子氏の一連の研究においては、連体形による各用法がしばしば相互に関連づけられて論じられており、特に信太（1996）では、推量辞の出現に着目しつつ、連体句、準体句、接続句、終止形上接句、連体形終止文、係り結び文の六類の句について、連体形による句としての総括的な比較対照が試みられている。

しかし、連体形の各用法の特徴を、データに基づき数量的に比較分析した研究は、いまだ十分になされているとは言いがたい。

土岐（2005）では、連体形終止法を終止形終止法や「ぞ」、「なむ」共起の係り結びと比較し、連体形終止をとる場合に現れる連体形は、他の場合と比較して、動詞、形容詞、助動詞の各品詞別に語の頻出度に特徴があることを明らかにした。また、土岐（2008）では、同様の調査を連体節連体形について行い、結果を連体形終止の場合と比較した。その結果、連体節連体形と連体形終止連体形とでは、各品詞別に頻出する語の傾向に異なる様相が見られることを明らかにした。

残る分析対象である準体句のうち、助詞が後接しないケースについては土岐（2009）、助詞「が」が後接するケースについては土岐（2010）、助詞「を」が後接するケースについては土岐（2011）、助詞「に」が後接するケースについては土岐（2012）、係助詞「は」が後接するケースについては土岐（2013）、係助詞「も」が後接するケースについては土岐（2014）、係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」「や」が後接するケースについては土岐（2015）で考察を行った。本稿では、その他の助詞が後接する準体句について分析を行う。

2. 調査対象資料

本稿で分析対象とした資料および使用テキストは以下の通りである。

『源氏物語』岩波新日本古典大系本

一方、土岐（2005）で連体形終止法および終止形終止法の分析対象とした資料および使用テキストは以下のものであり、源氏のみを使用した準体法および連体法の場合とは調査範囲が異なっている。

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語』：宇津保物語は

おうふう「うつほ物語全」、大和物語は岩波旧日本古典大系本、その他は岩波新日本古典大系本による。

また、諸本の校異で当該の形態に異同があるものはすべて対象から除外した。

3. 分析対象形式

土岐（2005）で考察した連体形終止については、地の文と会話文とで大きく用法が異なることが先行研究により指摘されているため、会話文中のデータに限定して考察を行った。これらとの比較上、連体法を分析した土岐（2008）や、助詞無し準体法および「が」「を」「に」「も」後接の準体法を分析した土岐（2009）、土岐（2010）、土岐（2011）、土岐（2012）、土岐（2013）、土岐（2014）、また、係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」「や」後接の準体法を分析した土岐（2015）でも、同様に会話文中のデータに限定して分析を行った。そこで、本稿で扱うその他の助詞が後接する準体法の用例も、以下、会話文中のデータに限定して考察を進めていく。

また、「～給ふ」、「～侍り」、(ラ)ル、(サ)スなどの待遇表現の補助動詞、助動詞が後接している場合は分析対象に含めている。このような待遇表現の接辞が入る場合と入らない場合とで、何らかの相違があるか否かという点については、今後、吟味していく必要がある。

今回の調査では、その他の助詞として、「より」「まで」「など」「と」「の」「から」「しも」「がごと」「だに」「のみ」「さへ」が見られた。

助詞「と」は、引用の「と」や「とて」、「とは」、逆接の「とも」などの例が合計24例ほど見られたが、今回の考察対象とする準体法ではないため除外した。

以下、それぞれの助詞別に準体法の用例を記述し、その後、まとめて比較分析を行うこととする。

4. 分析

4.1. 助詞「より」が後接する場合

4.1.1 助動詞を含まない動詞準体法

助動詞を含まない動詞準体法の用例を、終止形・連体形異形の活用語と、形態からは活用形の判別がつかない終止形・連体形同形の活用語とに分けて、動詞の意味タイプ別に分類したのが、次の表1である。

表1 「より」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	2	0	2
存在	0	0	0
感情・思考・知覚	3	0	3
計	5	0	5

以下に動詞句準体法の動詞意味タイプ別全例を挙げる。

動作・変化動詞

【同形】

- 1) (入道)遊ばすよりのなつかしきさまなるは、いつこのか侍らん (2,66,3)
- 2) (夕霧)年の数添ふまゝに、内にまいるよりほかのありき、うゑしうなりにて侍れば、いにしへの御物語りも、聞こえまほしきおり多く過ぐし侍をなむ (4,257,2)

【異形】

用例なし。

存在詞

用例なし。すべて助動詞付加文(キ3例、ケリ1例)

感情・思考・知覚動詞

【同形】

- 3) (紫上)かゝる世を見るよりほかに、思はずなることは、何事にか (2,11,12)
- 4) (明石君)いにしへのためしなどを聞き侍につけても、心におどろかれ、思ふよりたがふふしありて、世を厭ふつひでになるとか (4,195,15)
- 5) (右近の文)かくてのみ、つくゝとながめさせ給よりは、時へは渡りまいらせ給て、御心もなぐさめさせ給へと思侍に (5,194,12)

【異形】

用例なし。

4.1.2 助動詞を含まない形容詞準体句

助動詞を含まない形容詞の準体法の例について、形容詞の意味についてABCの類型を立てて考察した吉田(1995)にならい、A情意的(感情形容詞、評価形容詞)、C属性的(次元形容詞注)、色彩形容詞、その他)、その中間的なB(否定形容詞、程度形容詞、感覚形容詞、時間形容詞)という三つの類型に分け、更にAの感情・評価形容詞の評価の意味について、プラス評価は+、マイナス評価は-という独自の符号を付したのが、次の表2である。

表2 「より」準体法 形容詞総数順(計1例)

形容詞	総数	類型	評価
ことごとし	1	A	-

以下に準体法形容詞の全用例(1例のみ)を示す。

- 6) (八宮)とりへにうち合わせたる拍子など、ことしきよりも、よしありとおぼえある女御、更

衣の御局への、をのがじしはいどましく思、(4,348,4)

4.1.3 助動詞を含む準体句

受け身と自発の(ラ)ル、使役の(サ)スなど、待遇表現以外の助動詞が現れる場合について、総数が多い順にまとめたのが次の表3である。

表3 「より」準体法 助動詞総数順(計22例)

形式	総数
キ	15
ム	5
ケリ	1
ラル	1

助動詞が現れる場合、節述語の中心となる品詞は動詞、形容詞、名詞と多岐に渡り、また、複数の助動詞が相互に接続するケースも多いが、述語の中心的品詞の種別は問わず、また、複数の助動詞が現れる場合は最句末のもののみを取り上げる。

ナリの場合、終止・連体同形の活用語につくナリは対象から除外した。表中、終止ナリと連体ナリが示されている場合は終止・連体異形の活用語につくものである。また、非活用語につくナリを体言ナリとしてある。

また、助動詞自体の活用が終止・連体同形のもは網掛けで示してある。

4.2 助詞「まで」が後接する場合

以下、「より」の場合と同様に、動詞意味タイプ別分布を表4に、形容詞総数順を表5に、助動詞総数順を表6に示す。また、動詞と形容詞の全例を挙げる。4.3節以下についても、それぞれの助詞について同様に示す。

表4 「まで」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体同形	終止・連体異形	計
動作・変化	7	2	9
存在	0	1	1
感情・思考・知覚	2	2	4
計	9	5	14

表5 「まで」準体法 形容詞総数順(計30例)

形容詞	総数	類型	評価
あやし	11	A	-
なし	3	B	0
おそろし	2	A	-
苦し	2	A	-
あらあらし	1	A	-
ありがたし	1	A	+

おこがまし	1	A	-
かたはらいだし	1	A	+ -
ことごとし	1	A	-
さわがし	1	A	-
しうねし	1	A	-
たいだいし	1	A	-
ところせし	1	A	-
にくし	1	A	-
はづかし	1	A	+ -
まばゆし	1	AB	+ -

表6 「まで」準体法 助動詞総数順 (計5例)

形式	総数
ズ	3
ベシ	1
ム	1

動作・変化動詞

【同形】

- 7) (母君)身にあまるまでの御心ざしのよろづにかたじけなきに (1,13,13)
 8) (源氏) この夢合ふまで又人にまねぶな (1,178,4)
 9) (源氏)いと賢き人の、末の世にあまるまで才たぐひなく、うるさながら、人としてかく難なき事はかたかりける (3,43,1)
 10) (内大臣) 君は、末の世にはあまるまで天の下のいふそくにもものし給ふめるを (3,181,4)
 11) (母御息所) かくひき別れて、平らかにものしたまふまでも過ぐし給はむが、心尽くしなるべきことを (3,405,14)
 12) (夕霧) 晴れへしき方にも見たてまつりなをし給までは、平らかに過ぐし給はむこそたが御ためにも頼もしきことにははべらめと (4,93,10)
 13) (薫) かく重くなり給まで、たれもへ告げたまはざりけるが、つらくも (4,451,3)

【異形】

- 14) (源氏) 琴は又、搔き合はするまでの形見にのたまふ (2,84,5)
 15) (源氏) 女になるまで過ぎにけるを、おぼえぬ方よりなむ聞きつけたる時にだにとて (2,362,14)

存在詞

【同形】

用例なし。

【異形】

- 16) (妹尼) つきなからぬさまになむ見え侍れど、例の人にてはあらじと、いとうたゝあるまで世をうらみ給めれば (5,349,10)

感情・思考・知覚動詞

【同形】

- 17) (匂宮) 御あたりには、あまりあやしと思ふまでうしろやすかりし心寄せを (5,21,3)
 18) (御息所) かひなき身ながらも、いましばし世中を思ひのどむるほどは、とさまかうごまにものをおぼし知るまで、見たてまつらむとこそ思たまへつれ (2,118,14)

【異形】

- 19) (源氏) つみにかく見たてまつりなし侍まで、をくれたてまつり侍ぬる心のぬるさを、はづかしく思たまへらるゝかな (3,227,11)
 20) (匂宮) 人もありがたしなどがむるまでこそあれ、人にはこよなう思おとし給べかめり (5,214,2)
 21) (大宮) この中将の、いとあはれにあやしきまで思ひあつかひ、心をさはがいたまふ見はべるになむ (3,65,7)
 22) (左中弁) 院はあやしきまで御心ながく (3,215,14)
 23) (大君) かゝる御心のほどを思ひよらで、あやしきまで聞こえなれにたるを、ゆゝしき袖の色など見あらはし給心あささに (4,392,3)
 24) (中君) 先つ比来たりしこそ、あやしきまでむかし人の御けはひに通ひたりしかば、あはれにおぼえなりにしか (5,83,5)
 25) (中君) かの君はいかなるにかあらむ、あやしきまで物忘れせず、故宮の御後の世をさへ思ひやり深く後見ありき給める (5,146,3)
 26) (弁尼) かの宮にだにまいり侍らぬを、この大將殿のあやしきまでの給はせしかば、思ふ給へおこしてなん (5,175,14)
 27) (弁尼) あやしきまで心のどかに、もの深うおはする君なれば、よも人のゆるしなくて、うちとけ給はじ (5,176,14)
 28) (薫) さるべきにやあらむ、あやしきまでぞ思ひきこゆるとぞ語らひ給ふべき (5,177,14)
 29) (匂宮) さるべきほどとは言ひながら、あやしきまでむかしよりむつまじき中に、かゝる心の隔ての知られたらむ時 (5,211,15)
 30) (侍従) あやしきまで言少なに、おぼおほとものし給て (5,283,14)
 31) (少将尼) あやしきまでつれなくぞ見え給やとて入りて見れば (5,359,1)
 32) (乳母) 客人のおはする程の御旅居見ぐるしと、荒へしきまでぞ聞こえ給ひける (5,159,14)
 33) (源氏) かの親なりし人は、心なむありがたきまでよかりし (2,363,5)
 34) (薫) いとうゐへしうならひにて侍る身は、何事もおこがましきまでなん (5,150,15)
 35) (夕霧) 御年のほどよりはおそろしきまで見えさ

- せ給ふ (4,61,11)
- 36) (侍従) うたて、おそろしきまでな聞こえさせ給そ (5,245,3)
- 37) (明石君) かうまで御覧じ知るべきにもあらぬを、かたはらいたきまで数まへの給はすれば (3,289,11)
- 38) (源氏) 苦しきまで思ふ給へらるゝ心のどけさに (3,163,8)
- 39) (少将尼) 苦しきまでもながめさせ給かな (5,357,2)
- 40) (按察使の大納言) 人からは、げに契ことなめれど、なぞ時のみかどのことへしきまで婿かしづき給べき (5,107,8)
- 41) (尼宮) この宮いとさはがしきまで色におはしますなれば (5,234,13)
- 42) (中君) 思そめつること、しうねきまでかろへしからずものし給めるを (5,152,1)
- 43) (内大臣) あやしくたいだいしきまで馴れさぶらひ、心に隔つることなく御覧ぜられしを (3,72,7)
- 44) (夕霧) いまはかくにくみ給とも、おほし捨つまじき人々、いとところせきまで数添ふめれば、御心ひとつにもて離れ給ふべくもあらず (4,146,2)
- 45) (師宮) いかうまさなきまで、いにしへの墨書きの上手どもあとを暗うなしつべかめるは、かへりてけしからぬわざなり (2,183,9)
- 46) (源氏) かゝる末へのもよをしになん、なまはしたなきまで思知るゝおりも侍ける (3,235,10)
- 47) (中将君) 大将殿は、さばかり世にためしなきまでみかどのかしづきおぼしたなるに、心おごりし給らむかし (5,145,14)
- 48) (大君) この人へも、よかるべきさまのことと聞きにくきまで言ひ知らすめれば (4,418,12)
- 49) (源氏) さる山がつの中に年経たれば、いかにいとをしげならんと侮りしを、かへりて心はづかしきまでなむ見ゆる (2,365,6)
- 50) (頭中將) はぶかずまばゆきまでもてかしづけるむすめなどの、おとしめがたく生ひ出づるもあまたあるべし (1,36,14)

4.3. 助詞「など」が後接する場合

「など」準体法の動詞の用例はなし。

表7 「など」準体法 形容詞総数順 (計2例)

形容詞	総数	類型	評価
かなし	1	A	+ -
～がまし	1	A	-

- 51) (内大臣) うつゝの人にもあまりけどをく、もの隔てがましきなど、け高きやうとても、人にくゝ心うつくしくはあらぬわざなり (3,16,5)

表8 「など」準体法 助動詞総数順 (計5例)

形式	総数
キ	2
ズ	1
終止ナリ	1
体言 (形容詞語幹) ナリ	1

- 52) (弁) かの君の年は、二十ばかりになり給ぬらんかし。いとうつくしく生い出で給ふがかなしきなどとぞ、中比は、文にさへ書きつゞけてはべめりしか (5,91,6)

体言 (形容詞語幹) ナリの例を以下に示す。

- 53) (薫) なをざりごとなどの給わたりの、心かろうてなびきやすなるなどを、めずらしからぬものにおとし給にや、となむ聞くこともはべる (4,368,4)

4.4. 助詞「の」が後接する場合

助詞「の」は動詞や形容詞の用例なし。助動詞「む」のみ8例見られ、すべて以下に挙げる例のように心内説明である。

表9 「の」準体法 助動詞総数順 (計8例)

形式	総数
ム	8

- 54) (源氏) 大学の道にしばし習はさむの本意侍により (2,281,7)
- 55) (内大臣) かくたまさかに会へる親の孝せむの心あらば (3,19,15)

4.5. 助詞「から」が後接する場合

助詞「から」は以下の助動詞「む」の例が1例のみである。

表10 「から」準体法 助動詞総数順 (計1例)

形式	総数
ム	1

- 56) (左馬頭か) 女と言はんからに、世にある事の公私につけて、むげに知らずいたらずしもあらむ (1,59,8)

4.6. 助詞「しも」が後接する場合

助詞「しも」は、以下の動詞異形活用語の例が2例見られた。

表11 「しも」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体同形	終止・連体異形	計
動作・変化	0	2	2
存在	0	0	0
感情・思考・知覚	0	0	0
計	0	2	2

動作・変化動詞

【異形】

- 57) (源氏) などかくうとましきものにもおほすべき。おほえなきさまなるしもこそ契あるとは思ひ給はめ (1,69,6)
- 58) (空蟬) かゝる方に頼みきこえさするしもなむ浅くはあらず思給へ知られ侍ける (2,388,10)

4.7. 助詞「がごと」が後接する場合

助詞「がごと」は以下の助動詞「つ」の例が1例のみである。

表12 「がごと」準体法 助動詞総数順 (計1例)

形式	総数
ツ	1

- 59) (源氏) さみな思なせど、浮かびたる心のすさびに人をいたづらになしつるかこと負ひぬべきかいとからき也 (1,132,3)

4.8. 助詞「だに」が後接する場合

助詞「だに」は助動詞の7例のみである。

表13 「だに」準体法 助動詞総数順 (計7例)

形式	総数
キ	5
ケリ	1
ズ	1

- 60) (東宮) しばし見ぬだに恋しきものを、とをくはましていかに、と言へかし (2,19,15)

4.9. 助詞「のみ」が後接する場合

助詞「のみ」は形容詞1例と助動詞「む」4例の5例が見られた。

表14 「のみ」準体法 形容詞総数順 (計1例)

形容詞	総数	類型	評価
若々し	1	A	-

- 61) (紫上) まだいとあえかなるほどもうしろめたきに、さぶらふ人とても、若へしきのみこそ多かれ (3,189,7)

表15 「のみ」準体法 助動詞総数順 (計4例)

形式	総数
ム	4

- 62) (源氏) たゞ心の筋をたゞよはしからずもてしづめをきて、なだらかならむのみなむ、めやすかるべかりける (2,371,10)

4.10. 助詞「さへ」が後接する場合

助詞「さへ」は感情・思考・知覚動詞の1例のみが見られた。

表16 「さへ」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	0	0	0
存在	0	0	0
感情・思考・知覚	1	0	1
計	1	0	1

感情・思考・知覚動詞

【同形】

- 63) (中君) かく人より深く思ひ沈み給へるを見れば、先の世も、とりわきたる契もやものし給ひけむと思ふさへ、むつましくあはれになん (5,15,15)

4.11. まとめ

それぞれの絶対数が少ないためもあり、助詞ごとの傾向の相違が特徴が非常に大きい。

「より」は動詞が5例、形容詞が1例、助動詞22例(内、15例が過去のキ)であり、動詞の内訳は動作・変化動詞が2例、感情・思考・知覚動詞が3例で、やや感情・思考・知覚動詞が多くなっている。

「まで」は動詞14例、形容詞30例、助動詞5例で、動詞の内訳は動作・変化動詞9例、存在詞1例、感情・思考・知覚動詞4例であり、「より」とはまったく異なった分布を示している。

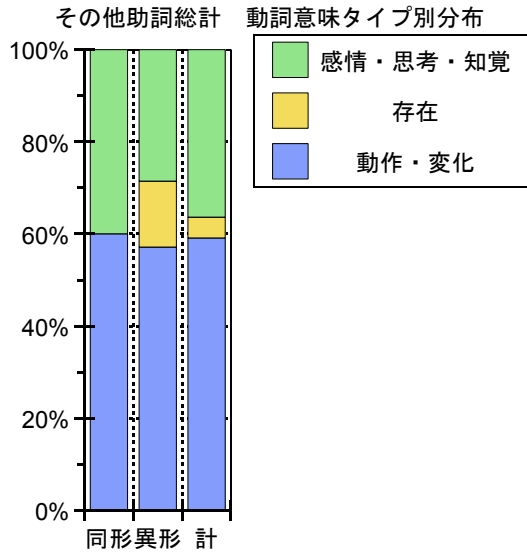
「など」は動詞がなく形容詞2例と助動詞5例、「の」は助動詞8例ですべてム、「から」も助動詞ム1例のみ、「しも」は動詞(動作・変化動詞)2例のみ、「がごと」は助動詞ツ1例のみ、「だに」は助動詞7例のみ、「のみ」は動詞がなく、形容詞1例と助動詞ム4例のみ、「さへ」は感情・思考・知覚動詞1例のみである。

以上の12の助詞のデータをすべて合算して集計すると以下ようになる。

表17 「が」「を」「に」及び係助詞以外の助詞総計動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	9	4	13
存在	0	1	1
感情・思考・知覚	6	2	8
計	15	7	22

グラフ1

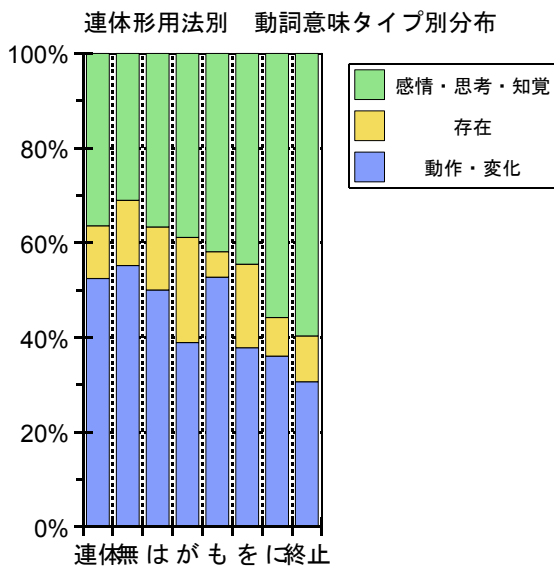


比較のため、連体法、助詞無し準体法、「は」準体法、「が」準体法、「も」準体法、「を」準体法、「に」準体法、連体形終止法の同形活用語、異形活用語の計の分布を土岐（2015）から以下に再掲する。

表18 連体形用法別 動詞意味タイプ別分布一覧

	連体	準無	準は	準が	準も	準を	準に	終止
動作・変化	731	16	30	7	39	45	31	19
存在	155	4	8	4	4	21	7	6
感情・思考・知覚	508	9	22	7	31	53	48	37
計	1394	29	60	18	74	119	86	62

グラフ2



グラフ2は、最左端が連体法であり、次の無助詞準体法から、「は」準体法、「が」準体法、「も」準体法、「を」準体法、「に」準体法、連体形終止法と、感情・思考・知覚動詞の比率が高まっていき、ほぼそれに反

比例するように動作・変化動詞の比率が下がっている。ただし、係助詞「は」と「も」は他の助詞よりも動作・変化動詞の比率がやや高い。

その他の助詞すべてを合計して見ると、存在詞の比率が非常に小さく、動作・変化動詞が最も大きく、感情・思考・知覚動詞も4割に近い高い比率を示すなど、係助詞「も」の分布に非常に近いことが見て取れる。これは連体法や連体形終止法との比較で見れば、他の係助詞同様に連体法のほうに類似性が高いと言える。

全体として、やはり準体法の分布は無助詞から接続助詞的用法を持つ「を」や「に」へと、相互に連続性を有しながら、動作・変化動詞から感情・思考・知覚動詞へと比重がシフトしていく傾向が見られる。

また、形容詞については、絶対数が少ないため結論づけるのが難しい面はあるものの、すべての助詞を総計して見ると、C（属性的）は見られなかったが、A（情意的）とB（中間的）の類型が現れ、かつプラス評価の意味を伴う形容詞もマイナス評価の意味を伴う形容詞もともに現れている。

連体形終止法では、Cの属性的形容詞は一例も見られず、Bの中間的な「なし」が3例見られる以外は、すべてAの情意的形容詞であり、かつ、Aの情意的形容詞の評価の意味合いは「良し」1例を除き、すべてマイナス評価の意味合いを伴うものであった。一方、連体法では形容詞の用例の総数が多いこともあって、ABCすべての類型が観察され、またプラス評価の意味合いを含む形容詞も豊富に見られた。（土岐（2005、2008））

以上の結果と比較すると、その他の助詞準体法は、Cグループが現れない点では連体形終止法に類似し、プラスとマイナスの両方の形容詞が現れる点では連体法に類似している。

また、動詞節に対する形容詞の出現率を見てみると、これも助詞ごとの相違が大きいため一律に位置づけることが難しいが、135%（動詞節26例、形容詞節35例）となっており、土岐（2009）、（2010）、（2011）、（2012）、（2013）、（2014）の結果と併せて、他の用法と比較すると、「が」準体法が29%（動詞節21例、形容詞節6例）、助詞無し準体法は14%（動詞節29例、形容詞節4例）、連体形終止法29%（動詞節62例、形容詞節18例）、連体法113%（動詞節1394例、形容詞節1573例）、「を」準体法27%（動詞節119例、形容詞節33例）、「に」準体法33%（動詞節86例、形容詞節28例）、「は」準体法20%（動詞節60例、形容詞節12例）、「も」準体法は30%（動詞節74例、形容詞節22例）であることから、明らかに連体法に類似した分布を示していると言える。

連体法と終止法の場合については形容詞の総出現数が多いため、分析の便宜上、対象としたのは6例以上出現した形容詞に限定している。準体法の場合は形容

詞の総出現数が少ないため、現れたすべての形容詞を扱っている。そのため、厳密な意味での両者の比較は出来ないが、以上の結果から、その他の助詞準体法は、「は」や「も」などの助詞の準体法形容詞が、意味の類型の観点からは連体法に近く、動詞と比較した出現率の観点からは連体形終止法に近いという特徴を示していたのに対し、どちらの面からも、より連体法に近接した傾向を示している。

また、助動詞については、「より」はキの次にム、「まで」はズ、「など」はキヤズヤナリ、「と」はタリ、「の」「から」はム、「がごと」はツ、「だに」はキの次にケリとズ、「のみ」はムとなっており、個々の助詞ごとの相違が大きい。全体としては、過去・完了系の助動詞と推量系の助動詞との間でどちらが優勢かという傾向差は見られないようである。

5. おわりに

本稿での分析結果を以下にまとめる。

古代日本語会話文中の助詞「より」「まで」「など」「の」「から」「しも」「がごと」「だに」「のみ」「さへ」準体句のデータを分析した結果、以下のような特徴が観察された。

1. 助動詞を含まない動詞準体句の場合、現れる動詞の意味タイプは、
 - 1 動作・変化動詞
 - 2 感情・思考・知覚動詞
 - 3 存在詞
 の順に多い。存在詞の割合は、連体法や連体形終止法、および他の助詞が後接する準体法の中でも最も低い。
2. 助動詞を含まない形容詞準体句の場合、形容詞の意味類型は、
 - A 情緒的
 - B 中間的
 の2種類が現れる。C 属性的形容詞は見られない。また、評価的意味を有する形容詞の場合、プラス評価の意味合いを持つものと、マイナス評価の意味合いをもつものとがともに現れる。
3. 助動詞を含む準体句の場合、助詞ごとの傾向差が非常に大きい。全体に、過去・完了系の助動詞と推量系の助動詞との明確な優劣は認められない。

本稿では助詞「より」「まで」「など」「の」「から」「しも」「がごと」「だに」「のみ」「さへ」が後接する準体法について考察を行った。これで準体法に関わるすべての助詞の分析が完了し、助詞ごとの準体句の特徴や傾向が明らかになった。

注

吉田 (1995) では、以下の形容詞が例示されている。
せばし、たかし、ちかし、とほし、ふかし、みじかし、ひろし、ほそし、ちひさし

主要参考文献

- 尾上圭介 (1982) 「文の基本構成・史的展開」森岡健二他編『講座日本語学2 文法史』明治書院1-19
同 (2001) 『文法と意味I』くろしお出版
小池清治 (1967) 「連体形終止法の表現効果—今昔物語集・源氏物語を中心に—」『国文学 言語と文芸』54、12-21
近藤泰弘 (1986) 「〈結び〉の用言の構文的性格」『日本語学』5-2、22-30
同 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
同 (2001) 「名詞節と項構造」『日本語文法』1-1、41-52
信太知子 (1970) 「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』82、29-41
同 (1987) 「『天草本平家物語』における連体形準体法について—『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討など—」『近代語研究』7、121-139、武蔵野書院
同 (1996) 「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を中心に句相互の関連性について—」『神女大國文』7、172-189
同 (2006) 「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」—句構造の観点から—」『神女大國文』17、29-44
土岐留美江 (2005) 「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1-4、16-31
同 (2008) 「平安和文会話文における連体修飾連体形と連体形終止連体形の比較分析」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』57、55-62
同 (2009) 「平安和文会話文における準体句—助詞が後接しない場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』58、31-39
同 (2010) 「平安和文会話文における準体句—助詞「が」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』59、15-23
同 (2011) 「平安和文会話文における準体句—助詞「を」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』60、(23-33)
同 (2012) 「平安和文会話文における準体句—助詞「に」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』61、(1-9)
同 (2013) 「平安和文会話文における準体句—助詞「は」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』62、(19-26)
同 (2014) 「平安和文会話文における準体句—助詞「も」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』63、(35-42)
同 (2015) 「平安和文会話文における準体句—係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」「や」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』64、(29-36)
山内洋一郎 (1959) 「院政期の連体形終止」『国文学攷』21、240-250、広島大学国語国文学会
同 (1963) 「奈良時代の連体形終止」『国文学攷』30、33-41、広島大学国語国文学会

- 同 (1964)「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」『広島大学文学部紀要』23-3、125-152
- 同 (1970)「下二段「たまふ」の終止法—連体形終止の観点から—」『国文学攷』54、55-58、広島大学国語国文学会
- 同 (1992)「平安時代の連体形終止」井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開』25-44、和泉書院
- 同 (1997)「助動詞「うず」の連体形終止について—中世における終止形の残存—」『文教国文学』37、1-8
- 同 (2003)『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版
- 吉田光浩 (1995)「平安期形容詞の意味と終止用法について—『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』を資料として—」宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会編『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』112-145、明治書院

(2015年8月17日受理)